

経口維持加算を通じて実現する“食楽”

～食べる楽しさを、ずっと続けるために～

都道府県：山形県

会員施設名：障害者支援施設 いきいきの郷

発表者氏名： 渋谷文恵、高梨翔大、藤本恵

I. 実践の目的・ねらい

当施設では高齢化が進み、嚥下機能低下・生活習慣病のリスク増加・認知症の進行など、「食」に関わる課題が顕在化している。利用者の“食楽”すなわち「食べる楽しみ」を守り、安全に経口摂取を維持する為には、多職種での支援体制が必要である。

環境整備と支援体制の構築を目的に進めた時、経口維持加算算定への道筋ができ、利用者一人ひとりの“食楽”を守る支援の幅が広がった。その実践を報告する。

II. 実践方法・取り組んだこと

- ① 利用者において、嚥下機能低下を示唆する事象の増加が確認された。
- ② 職員間の知識差を埋め、研修動画を作成し“食楽”を守る為の研修を実施した。
- ③ 詳細なマニュアルを整備した。
- ④ 嚥下機能低下が疑われる対象者に、段階的な嚥下評価を実施した。
- ⑤ 経口維持加算算定を開始（6月）。
- ⑥ 施設での嚥下内視鏡検査（以下、VE検査）の導入（7月）。

III. 実践の結果

- ・「食べられなくなってから対応する」支援ではなく、「変化を早期に捉えて支える」支援へと職員の意識が変化し、“食楽”を守ろうとする姿勢が増えた。
- ・VE検査を導入することで、嚥下機能の課題を客観的に評価でき、食形態や姿勢調整などの見直しが円滑に行えた。
- ・誤嚥の観察の視点、医療連携、多職種評価も含めた支援のマニュアル化ができた。
- ・経口維持加算算定のプロセスは安全に食べる工夫が広がり、“食楽”を維持・拡大できる支援が可能となった。

IV. 分析・考察

経口維持加算の取り組みにより、職員の観察力が高まり、利用者の小さな変化を見逃さないケアが実現した。障害特性と加齢変化が重なる利用者に対し、医療・専門職との連携が“食楽”を守るうえで不可欠である。本取り組みは、利用者の“食楽”を守りつつ安全に経口摂取を維持できる支援に繋がった。今後は、マニュアルを定期的に見直し、利用者一人ひとりの“食楽”をより豊かにする支援の継続と発展を目指していきたい。

※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。

皮膚トラブルと排泄ケア

～快適な排泄ケアを提供するには～

都道府県：福井県

会員施設名：金津サンホーム

発表者氏名：宮下 恵美 辻 詩織

I. 実践の目的・ねらい

当施設では近年、臀部の褥そうや陰部のただれなどの利用者の皮膚トラブルが増えており、利用者のQOLの低下や職員の業務負担が大きくなっている。利用者の高齢化や持病のため、薬剤による排便コントロールをしているが、便の性状が悪化してしまい排泄ケアが難しくなっていると感じている。特に泥状・水様便の処理には、衣服や身体への汚染も大きいことから、お湯で湿らせた布オムツを使用し拭き取り・拭き上げをするため、どうしても摩擦が生じ皮膚トラブルにつながっている。さらに利用者の食事量の低下や身体機能の低下など、様々な要因が加わり一度生じてしまった皮膚トラブルから回復が困難になっている。また近年の物価高の影響による経費増加や、災害時でも安定したケアを提供できるよう考えていく必要もあった。

今回、以上の課題に対し新しい排泄ケアの導入、見直しに取り組むことにした。

II. 実践方法・取り組んだこと

1. 布オムツ、清拭タオルの廃止

布製品は皮膚への摩擦が強く、皮膚を痛めてしまうため肌に優しい素材の大判や厚手のおしりふきや、吸水タオルを代替として使用した。

2. 清拭方法の見直し、統一

職員間で清拭方法にばらつきがあったため、紙オムツメーカー主催の研修に参加し、基本的な技術と知識を深めた。

3. 排便コントロール

嘱託医、看護師と連携しブリストル便形状スケール（以下、BSS）を使用、座薬や服薬の調整をする。

4. 利用者の栄養状態の改善

栄養状態が皮膚トラブルに影響すると考え嘱託医、看護師と連携し食事量が減ってきた利用者に対し、栄養補助食品の補食を導入する。

III. 実践の結果

1. 泥状や水様便の場合は洗浄ボトルの水圧を利用して洗い流し、なるべく摩擦を与えないよう考慮した。おしりふきや吸水タオルを使用することで、ふき取りもしやすくなった。使用後は使い捨てができるため衛生面改善や業務負担軽減にもつながった。

2. 基本的な清拭方法を学ぶことで、自己流になっていた清拭を改めることができた。

3. BSSを使用することで、職員間でも便の状態を共有しやすくなった。その日の便の状態によって迅速に薬剤を調整できるようになり、便状態や排便回数の改善につながった利用者も増えた。

4. 栄養補助食品の補食により、低栄養状態が改善している。

IV. 分析・考察

当施設の利用者の皮膚トラブルに対し、皮膚の摩擦軽減・清潔・保護に重点を置き排泄ケアを見直し、排便コントロールによる便状態の改善を図った。自己流になりがちな介護技術を改め、定期的に見直していく必要がある。陰部というデリケートな部位であるため、利用者の尊厳を守りながら今後も継続して快適な排泄ケアを提供していきたい。

※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。

アシスタントワーカーと支える新しい介護現場

～みんなで支える介護のかたち～

都道府県：大阪府

会員施設名：障害者支援施設 エフォール

発表者氏名：井本 真梨子

I. 実践の目的・ねらい

フロア業務（起床介助から就寝介助までの利用者支援）を行う中で、目やにの除去、寝ぐせ直し、爪切りなどの整容面において、利用者自身では対応が難しい方が多く見られる。現状では、職員が業務の合間にこれらの支援を実施しているが、十分に行き届かない場面もある。そこで、フロア業務の負担軽減を目的として「アシスタントワーカー（AW／介護助手）」を募集し、間接的業務を担ってもらうことで、利用者支援の質の向上と職員の業務効率化を図る。

II. 実践方法・取り組んだこと

「アシスタントワーカー」の導入

※令和2年度から大阪市のモデル事業として実施し、令和4年度から事業化された福祉・介護人材支援事業

・「アシスタントワーカー」導入にあたり職場からメンバー選出し、業務改善チームを結成。フロアスタッフからの聞き取り、利用者に対しての直接的業務と間接的業務の仕分け、仕事内容の抽出等を実施。

・アシスタントワーカーに実施してもらう業務内容を検討（入浴準備、シーツ交換、洗濯たたみ・返却、居室洗面台掃除）

決定事項をフロアスタッフへ周知

・写真付き手順書の作成

・アシスタントワーカーへ業務での困りごとがないかの聞き取り・改善

・アシスタントワーカー導入後の業務負担の変化のアンケート

III. 実践の結果

・アシスタントワーカーを4名採用。

・洗濯物業務について、誰でも仕分け作業ができるよう手順書を作成した。スチールラックに利用者名を記載し、入浴ごとに色分けを行うとともに、洗濯物のたたみ方を統一した。また、入浴準備やシーツ交換などの業務についても手順書を作成した。その結果、業務の標準化が進み、作業効率の向上につながった。

IV. 分析・考察

・フロアスタッフがこれまで業務の合間に行っていた入浴衣類の準備や、更衣時に必要な衣類がタンスへ返却されていないケースが多く、その都度洗濯場まで衣類を取りに行く必要があった。

しかし、アシスタントワーカーが洗濯物たたみおよびタンスへの返却を担当することで、フロアスタッフが洗濯場へ衣類を取りに行く回数が減少し、入浴衣類の準備不足も減った。その結果、作業の分担による業務効率の向上が図られ、フロアスタッフは直接業務に集中して取り組むことができおり、フロア業務の負担軽減につながっていると考えられる。

※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。

口腔ケアの取り組みと評価

都道府県：山口県

会員施設名：鼓澄苑

発表者氏名：兼清 弘行、渡邊 啓子

I. 実践の目的・ねらい

口腔内環境の改善を目的にスポンジブラシや薬用マウスウォッシュをケアに取り入れた。また個々に応じたブラッシングやケア方法を学び知識技術の向上に取り組んだ。これらの取り組みが口腔内環境の改善に効果があったか評価した。

II. 実践方法・取り組んだこと

1. 取り組み前の現状把握

(1) 磨き残し調査

歯垢染色を行い、プラークコントロールレコードを使用し可視化

(2) 職員の口腔ケアに対する質問紙調査

2. 取り組みの実施

(1) 口腔ケアに関わる職員のブラッシング指導を実施。(歯科衛生士より指導を受けた職員による伝達研修、歯科衛生士の指導を動画で共有)

(2) 口腔ケアについて、個別性に合わせたケアの検討

(3) 1週間の歯磨き強化週間の実施。(1回/月)

3. 取り組み後の評価(1年3ヶ月後)

(1) 磨き残し調査

歯垢染色を行い、プラークコントロールレコードを1.(1)と比較評価

(2) 1-(2)に加え、取り組みに対する質問紙調査

III. 実践の結果

1. プラークコントロールの比較

(1) 取り組み前スコア 100% 取り組み後スコア 93.9%

ウィルコクソン検定では $P=0.012$ と有意差を認めた($P<0.05$)

2. 職員への質問紙調査

(1) 「口腔ケアのブラッシング指導は役に立ちましたか」については「役に立った」との回答が86%であった。今後も「受けてみたい」との回答が100%であった。

(2) 「口腔ケアに自信があるか」については、「ある」との回答が取り組み後は、5%増加していた。「あまり自信がない」「自信がない」は27%減少していた。

(3) 歯磨き強化週間では「いつもより意識して取り組めた」との回答が82%であった。

IV. 分析・考察

100%であった磨き残しが、取り組み後は93.9%とわずかではあるが、減少している。このことから、今回の取り組みは効果的であったと評価できる。質問紙調査の結果から、職員へのブラッシング指導が、口腔ケアに対しての意識、スキル向上に効果があったと考える。また、歯磨き強化週間では、強化週間終了後の日常のケアでも、多くの職員が継続して、口腔ケアのポイントを意識しながら、取り組んでいることから、意識啓発に効果あったと考える。しかし、まだ多くの磨き残しがあることから、さらなるブラッシング技術の向上が課題となった。